

カンボジアの農業にふれて思うこと

カンボジア国の国土は、比較的平坦で広大な肥沃農用地が広がっている。熱帯モンスーン気候帯にあり一年を通して温暖で降雨にも恵まれている上に、大メコン河が国内を縦断し水資源は比較的潤沢である。このような恵まれた自然環境の中で、カンボジアは古くから稲作の盛んな農業国であり、優れた在来水田灌漑技術や多くの在来稲作種を擁していた。近年では野菜栽培等にも力を入れているがコメは依然として同国の主農産作物であり、同国の主要な輸出物にも位置付けられている。しかしながら、タイやベトナムといったコメ輸出大国を隣国に控え、その収量や品質はかなり見劣りする(コメ平均単収は約 2.5 t/ha)。「カ」国ではコメの生産性向上策として灌漑整備や農業技術の改善が叫ばれ、さまざまな灌漑事業の着手やその推進を担う人材の育成が進められている。

水田稲作を主対象にした近代的灌漑技術の普及や灌漑面積の拡大には、担当灌漑技術者の能力向上が不可欠である。灌漑政策の持続的な展開を考えれば、とりわけ新人技術者の育成が大切なことから、筆者は今回、新人技術者研修プログラムの検討・作成を担当することになった。同研修プログラムの作成作業は、水資源気象省(MOWRAM)新人職員の配置や能力を踏まえつつ CUDBAS 手法を援用して研修ニーズを明らかにし、同ニーズに叶った研修プログラムの策定を行うとともに、現研修実施環境に応じた研修プログラムを策定した。また、新人採用が著しく低迷している現状から、今後の持続的展開にむけて新人技術者の採用が急務とする提言をまとめた。紙面の都合もあり、この灌漑技術者研修プログラム内容には深く立ち入れないが、ここでは農業に係わるカンボジア特有の事情に少々触れておく。

上述のように MOWRAM の職員年齢分布は極めて歪である。40 歳半ば～50 歳の職員数が特出し、その前後は極端に少ない。若手職員が少ないのは近年の人事政策失敗のせいだが、壮年者層人口の欠落には理由がある。あのポルポト時代の爪痕なのである。有能な技術者層がぽっかりと消えている。灌漑農業を担うべき技術者群の人数構成にも、あのポルポト時代の影響が今も解消されていない。当時のクメール・ルージュは、原始共産制社会を理想として極端な重農政策を進め全国民の約 3 割以上を抹殺し

た。彼らは、貨幣経済の廃止、近代科学技術及び同技術者らの徹底的な遺棄、強制移住農民による灌漑水路網(いわゆるポルポト水路)建設などのほか、浮稲や在地の稲伝統種を徹底的に駆逐した。農業技術に係わる者とすれば、あのような惨劇が一つの非現実的な「農業思想」に深く関わっているところに無関心ではいられないものを感じる。クメール・ルージュの稲作政策は「目指すもの」というよりは「進め方」にこそ大きな誤りがあったという識者もいるが、はたしてそうであろうか?膨大な人力を投入し 1km 格子状に整えられたポルポト灌漑水路網は、地形や起伏あるいは土質などを全く無視したものでまったくの遺物と化している。「カ」国浮稲は洪水に叶った栽培種として多様種を誇ったが、極端に品種を減らしている。多様性や特殊性への排除欠落が、農業での大失敗をもたらしたのみならず、将来への禍根を残すに至っている。彼らが農業で目指したものは、どうも「多様性の排除」から出発しているようであり、それがひとつの「失敗の本質」であるような気がしている。

クメール・ルージュは多くの国民のみならず内部の仲間を際限なく排除していった。そういえば、農業施策面においてそうであったように、彼らは政策運営や組織管理の面でも少しの「異端」や「異質」も許容できない集団であり、一貫して多様性の排除に邁進した人々だということであろう。カンボジアは信仰心の篤い上座部仏教の国である。奥ゆかしく心優しいカンボジアの人たちですら、多様性を蔑にすると(あるいは同義の極端なイデオロギーに浸りきると)あのような惨事や破滅が出現するのであるだろうか。(2013 年 1 月松島)



水資源気象省の本庁舎メインゲートの真横に堂々と置かれた仏教パゴダ(カンボジアの人々の信仰深さを象徴しているようで、特に印象的であった)